

「責任」について考える



■胎内支部 副支部長 中条小学校 校長 松原 利弘 (H元年度)

ニュースを見ていると「責任の所在」という言葉を耳にすることがあります。学校現場でも、「責任」という言葉を、しばしば聞くのではないのでしょうか。これらは、何らかの

取組や事業の結果として、成果を挙げなかった、または、事故につながった等のときに聞くことが多いようです。「責任」は、仕事の結果として、その立場にある人に求められるように感じています。

別の視点で考えてみたいと思います。「責任」を意味する英語は「responsibility」です。この語は、応答を意味する「response」と、能力を意味する「ability」とで構成されています。つまり、「応答する能力」と解釈できます。「責任」を結果として考えるのではなく、「職を遂行する能力」と捉えて

みてはどうでしょうか。学校は、校長、教頭、教諭、養護教諭、事務職員等、多くの職で、その業務を進めています。分掌を見ても、教務主任、学年主任、教科主任等、その仕事はさまざまです。学校には数多くの責任が存在しているといえます。ときわ会員は、学校で、それぞれの立場で懸命に仕事をしていますが、時折、「自らの職を遂行するために、自分は必要な能力を備えているか。」と自らに問うてみてはどうでしょうか。能力を備えていれば、結果として「責任を果たす」ことができるのだと思います。

教師としての資質、能力の向上を考えると、「ときわ会本旨」が、まず頭に浮かびます。「社会的責任と自覚を堅持する」ことは、「その能力を備える」ことが前提になるのかも知れません。